

## 恋

ミントの葉をつまみ  
その香が桜の花びらのように  
はらはらと舞い散る  
そんな大気の中を  
ひとつ  
またひとつ、と  
歩いている気がする

そこにはひとつの瞳がある

ミントの繁みを掻き回し  
その香が疾風のように  
ひゅうっと通り過ぎる  
そんな果てしの無い小道を  
ひとつ  
またひとつ、と  
たどっている気がする

そこにはひとつの掌がある

その掌から瞳へと  
憧れに満ちた僕の体温が  
(ふるえを帯びたころとして)  
静まっては再び高まる  
なだらかな波のように伝わり  
うすあおい大気の中へ放射されてゆく

ミントの中を泳ぎ  
そのかすかな葉擦れのように  
包まれるでもなく  
愛撫されるでもなく  
ひたすら  
寄り添っていたい、と  
まどろみ続けている気がする

そこにはただ  
感覚があるばかり

**(2008.10.17)**